第11課　逆戻りした民

【暗唱聖句】

「またわたしはレビ人に、身を清めて門を守り、安息日を聖とするように命じた。わたしの神よ、このことについてもわたしを心に留め、あなたの大いなる慈しみによって、わたしを憐れんでください」ネヘミヤ13：22

【日曜日・神殿の腐った指導者たち】

トビヤはネヘミヤの城壁工事を妨害した地主階級に属するユダヤ人です。トビヤ家は後に（2～3世紀ごろ）絶大な権力を持つようになるのですが、このときホロニ人サンバラトと共に城壁工事を、「できたとしても、そんな石垣など狐が登るだけで崩れてしまうだろう」と言ってあざ笑いました。彼は金持ちで、大祭司エルヤシブの家族と姻戚関係があり、その関係を通じてネヘミヤの行動を探る役目をはたしたと言われています。ネヘミヤもユダの貴族を無下に無視できず、しばしば会見を行うこととなります。12年間総督として働いたネヘミヤが一時期エルサレムを留守にしたときには、エルヤシブは捧げ物や十一の穀物、祭具などが納められていた神殿の一室を、トビヤに与え、個人的に利用させてしまいます。これによって、神殿は汚されてしまいました。トビヤは神殿に永住することを認められたのですが、ネヘミヤは戻って来るや，トビヤの家具を投げ出して、追い出したのでした。ネヘミヤはまた，エルヤシブの子ヨヤダの子らの一人を、ホロン人サンバラトの娘と結婚していたからです。

【月曜日・耕地にいたレビ人】

「またわたしは、レビ人に与えられるはずのものが与えられず、務めに就いていたレビ人と詠唱者が、それぞれ自分の耕地に逃げ帰っているのを知った」ネヘミヤ記13章 10節

神殿の奉仕者であるレビ人と詠唱者が、家族を安なうために各自の耕地に逃げ帰っていました。これは本来彼らに与えられるはずの什一や捧げ物がきちんと分配されていなかったからでした。トビヤが私用に使っていた部屋は、本来神殿の奉仕者たちを支えることになる什一や他の捧げ物が保管されるはずの部屋でした。献金が適当に扱われるのを知れば、人々は捧げる意欲を失うのは当然のことで、ユダの人々も徐々に熱心さを失い、什一や捧げ物を渋るようになっていったのでした。ネヘミヤはもう一度、やり直さなければなりませんでした。ネヘミヤはトビヤを追い出し、代わりに忠実な管理者をたて、様々な物をきちんと管理させるようにさせたのでした。それはあたかも、腐敗した指導体制を一掴みに引っこ抜いたかのようでした。ただ、大祭司エルヤシブを換える権限をネヘミヤは持っていませんでした。それは、アロンの祖先を通じて継承されてきたものだからです。

【火曜日・十分の一と捧げ物】

ユダの人々が忠実に什一を捧げなくなったことによって、神殿の務めは崩壊し、礼拝制度が危機にさらされました。礼拝をつかさどる神殿の働き人たちが、自分たちの生活を守り、家族を支えるために神殿の働きに集中できなくなってしまったのでした。

「十分の一の献げ物をすべて倉に運び、わたしの家に食物があるようにせよ。これによって、わたしを試してみよと、万軍の主は言われる。必ず、わたしはあなたたちのために天の窓を開き、祝福を限りなく注ぐであろう。」マラキ書3章 10節

什一は自由献金ではなく、神様のものと教えられています。それを捧げることで、神様は天の窓を開き、祝福を限りなく注ぐと約束されています。この什一と諸献金により、教会や伝道の働きが支えられているのは、当時も今も変わりません。

【水曜日・安息日に桶の中でぶどうを踏む】

「またそのころ、ユダで、人々が安息日に酒ぶねでぶどうを踏み、穀物の束をろばに負わせて運んでいるのを、わたしは見た。またぶどう酒、ぶどうの実、いちじく、その他あらゆる種類の荷物も同じようにして安息日にエルサレムに運び入れていた。そこで彼らが食品を売っているその日に、わたしは彼らを戒めた」ネヘ13：15

ネヘミヤは安息日に酒ぶねでぶどうを踏んだり、穀物を運んだりしているのを目撃し、長官の責任として、彼らを戒めました。ネヘミヤは、「なんという悪事を働いているのか。安息日を汚しているではないか」（ネヘミヤ13:17）と言って、責めたのでした。ネヘミヤは有言実行タイプで、安息日の始まる前にエルサレムの城門の扉を閉じ、安息日が過ぎるまでそれを開けないように言いつけました。さらに、部下をその門の前に立たせ、安息日には荷物が決して運び込まれないようにすることで、安息日に売り買いができないようにしたのでした。ネヘミヤを憎む者たちは大勢いただろうと思われますが、彼は動じることなく、断固として御言葉の正義を貫いたのでした。

【木曜日・あなたたちの先祖がそのようにしたから】

「なんという悪事を働いているのか。安息日を汚しているではないか。あなたたちの先祖がそのようにしたからこそ、神はわたしたちとこの都の上に、あれほどの不幸をもたらされたのではなかったか。あなたたちは安息日を汚すことによって、またしてもイスラエルに対する神の怒りを招こうとしている」（ネヘミヤ13:17，18）

過去の失敗や過ちは、現代の大切な教訓となります。同じ轍を踏まないことで、守られるからです。逆に、過去からの教訓を学ばないことは本当に愚かなことです。その場合、同じ不幸が繰り返される可能性が高くなります。そのことがわかっていながら、時間が経過し、世代が変わっていくうちに、過去の教訓も徐々に力を失ってしまうようです。

「そのころ、ある安息日にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になったので、麦の穂を摘んで食べ始めた。ファリサイ派の人々がこれを見て、イエスに、「御覧なさい。あなたの弟子たちは、安息日にしてはならないことをしている」と言った」マタイ12:1，2

イエス様の時代には、ネヘミヤの時とは逆に、律法主義的な考えが多くみられるようになっていきます。律法を厳格に守ろうとしている点では、ネヘミヤのときよりもましかもしれませんが、

正しいことも行き過ぎると、最も大切な愛や憐れみの心を失わせてしまうので注意が必要です。